



No. 26

発行所
社会福祉法人
山形県手をつなぐ親の会
事務所
山形市旅籠町
1丁目10番30号
山形県社会福祉会館内
TEL 山形 6572
印刷所
K.K. 誠文堂印刷所

芦川先生との別れのことは

会長 中村 律

日頃お元気そうだった先生が、今は呼んでも返らぬ人になられたとは信じようのない悲しみであり、ふと大きな灯が消えたような限りないまどいを感じております。

今思うと、倒れるまで栄光園のためにおつくし頂き、病床にあっても終始栄光園の子供の事を口にされていたとお聞きして、今更ながら先生の御人格に感泣するばかりです。

ほんとうに、有難うございます。私共はつねづね先生がいなければ栄光園は生まれなかったし、育たなかったと思っております。

十年ほど前知恵のおくれた人達に生甲斐をもたせる施設をつくろうという話が持ち上ったとき、率先して

毎日を生きぬいております。思えば先生のこの偉業はもとより売名でもなく、慈善でもない崇高な人間愛に裏打ちされ、純粹に恵まれないことも達によせられる深く大きな愛情そのものであったと申せましょう。

高邁な識見は草創時代の栄光園にしっかりと精神的礎をつくり、温かく伸びのびと然も真面目な栄光園の気風をつくってくれました。

私共は、この先生の遺訓を体してますます斯の道に精進していくことをここに誓いいたします。

何卒在天の御照導を賜わりますようお願い申し上げます。

ここに会員一同を代表し、心から御冥福を祈りつつお別れの言葉といたします。

(昭和五十二年十一月二十二日
栄光園葬における弔詞の中から)

栄光園長
橋本 久蔵

生者必滅会者定離は世のならいと申しますが、平素ご壮健そのものであった先生が、しかも医者として栄光園の園生はもとより、広く市民の医療に仁術の限りを尽してこられた日々を考えた時、まさかご自身が突然の病魔にむしばまれようとは夢想だにしなかった事でありました。

私と先生との出会いは昭和四十二年障害者の福祉が、今ほど高まっていない時代です。「この子等を世の



— 松 風 園 その 1 —

発足以来八年間、授産施設・通勤寮と、そしていま更生施設の竣工を真近に控えて一層内容の整備が図られようとしております。

お蔭様で百二十八名の園生はもとより、その親達は人としての可能性を信じて、力強く

光に」を合言葉に親の会同志の先頭に立って、授産施設栄光園づくりのため奔走されました。

医者としての激務の合い間を縫って、夜を日についてのご活躍でありました。

「徳は孤ならず……」

先生の高邁な理想と熱い情熱に共鳴する多数の同志が集まりました。私も当時福祉関係の役所に居りましたので、お手伝い申し上げているうちに、先生はじめ同志の方々の意気に感じ、栄光園づくりの仕事に参加させていただきました。

あれ以来十年、いま栄光園は大きく成長しています。姉妹施設の万世通勤寮も二十四名の明るい笑い声に包まれています。

更生施設は先生自らの命名で、松風園と名づけられました。その完成があと旬日とせまった時に、逝ってしまわれようとは……痛痕の極みであります。

親の会経営の三施設は、吾々の機能と全県下の期待を集めいま三位一体の活動を始めようとしています。「もう一度栄光園へ行ってみたい」死期を感じられたのか、ふともらさ

れた先生のお言葉が、私の頭にこびりついて離れません。その願いにお応えして、栄光園にお別れに来ていただきました。声のない柩の中の先生と、ただすすり泣きだけの園生との別れでした。

先生の絶える事のない笑顔、こうと決めたらたても動かない信念の強さ、そういうご遺徳にぞっこん心酔している若い職員の方々に立って私は老骨に鞭打って頑張る事を誓います。

先生の高邁な理想を確実に、次の世代に受け継がせるまでは……施設が安定軌道に乗った時、ゆっくり自適の生活を……。

それはついにかなえられない夢でした。奥様はじめ、ご遺族には申し訳ない気持ちでいっぱいです。

先生を慕う百余名の園生職員の慟哭が、天国の先生に届くように祈りをこめてお別れの辞を申しあげます。

(昭和五十二年十一月二十二日
栄光園葬告別の辞の中から)

松風園だより

栄光園は、各関係機関や団体のご援助、ご指導により順調に発展の途をたどりつづけております。

すでに二十四名の園生が、通勤寮を足がかりに、或は家庭から、いろ



— 松 風 園 その 2 —

いろな職場に就職、懸命にがんばっておりますが、一方栄光園の園生の重度化という問題に直面し、栄光園が授産施設としての使命を果たすため三〇%を超える重度者のための施設が欲しい……と更生施設の建設にむかって運動を展開したのが、一昨年の秋でした。

この強い要望が認められ、五二年四月、日本自転車振興会補助八、三二万円、県補助三、一五〇万円、その他共同募金会、県内市町村及び米沢市の補助が決り、更に県内一円からの善意の寄付をいただき、総額一億三、〇八二万円の予算をもって五十二年六月二十八日に着工しました。

その間、必ずしも順調に進んだわけがなく、いろいろな障害につき当たりましたが、中村会長さん初め、建設途中で亡くなられた芦川前園長先生、山村理事さん、大谷前障害福祉課長さん、その他の方々のお力で乗り越えることができました。

五十二年十二月十二日、ようやく完成いたしました。鉄筋コンクリート造り平屋建、九〇八平方メートルの近代的な素晴らしい建物が、楢林に囲まれ

て誕生しました。

芦川前園長先生に一目見ていたできたかった……と 東奔西走された過ぎし日を思い、胸のつまる思いでした。

職員は栄光園より四名異動しましたが、他は百数十名の中から選ばれた優秀な職員を配置することができたのも幸いでした。

約半月の研修と準備を終え、去る一月六日第一陣二五名が保護者と福祉事務所の係員に付添われ、不安なおもちで入園しました。

明るい暖房のきいた部屋、真新しい寝具、そして若々しい職員が彼等を迎えました。

言葉のない人もいます。一米足らずの短軀症の人もいます。ちょっとも落着けない人もいます。夜尿のひどい人もいます。

然し彼等は、彼等なりに懸命に生きようと精一杯の努力をつづけているのです。私どもは入園の日に園生を前にして

『松風園をあなた方の楽園に育てます』と誓いました。

楽園とはただ遊び、腹一杯食べ、寝ることでは勿論ありません。自分

のもてる力を十分出し切った喜び、

その結果を周囲から承認されたときの充実感、他人の為に役立っている社会の為に役立っていると自ら感じとったとき、彼等は安らぎをおぼえます。ものごとやりとげたという成功感の繰返しによって、自信をもつようになるでしょう。

作業指導はそれらの欲求を満たす重要な一方法であると考えますが、そんな施設が楽園であると信じております。

栄光園に勤務して

指導員

佐藤 清一

栄光園に勤め、三か月になろうとしています。朝出勤すると、園生たちは、元気良く「おはようございます」そして、私のスリッパを、ちゃんとそろえて待っていてくれるのです。私はこういうやさしい、気持を

持っている園生たちと、一緒に働けることを、とてもうれしく思っています。それなのに精薄児を特別な目で見ている人が多いようですが、もっと大きな目を開けて、良く見てほ

しいのです。園生のなかにも、就職

が可能と判断される人も多い様に思われます。私は食肉加工を担当しており、女子が十名と、男子が二名の、十二名です。園生たちは上手に包丁を使い、作業を行ない、仕事の順序も良く知っていて、園生同志でゆかいにこにこしながら仕事をやっております。

そんなある日、M子さんが、私にこう言うのです。「先生、私たちは栄光園を卒業されるのか、卒業されないのか」と聞くのです。私は「早く卒業したいのか」と聞くと「うん早く卒業して、会社にも行って働きたいなあ」と、言っているのです。私はそれを聞いて、胸が熱くなる思いでした。よし、それだけの気持を持っているならば、園生が社会復帰のできる様、いろんな面から指導をし、私自身もいろいろ勉強をし一人でも多くの園生が、社会復帰できる様に、頑張っておこうと決心しました。M子さんが一生懸命頑張っていました。喜んで卒業して行く様子が、目に見える様に、これが現実となる様、園生と共に力を合せて一生懸命頑張っておこうと思っております。

松風園に勤務して

指導員

吉池 道夫

私が松風園に勤務して、早くも三か月近く過ぎようとしています。が、気持ちの上では無我夢中で、その日の反省すらないで終る毎日の連続です。八年程前、ある施設へ行ったのがこの仕事に就くきっかけでした。その時まで私は、その施設の子供たちに対しては、けっして良い感情はいだいておりませんでした。むしろ蔑視さえしていたようです。ところが、例外と子供たちは明るい、精神的に空虚な所があるのに気がつき考えさせられました。その時以来、彼等に対する私の感情が変化して来たようです。

私はこれまで三年近く、一般の会社で働いてきたのですが、今一番異なっている事は、私自身の内面的なものです。それは、今までと違って十二分に空気を満喫し、両手をいっぱい広げて働いている様な気がするからです。

一日の仕事が終り家へ帰っても、今までの疲れとは、まるで違う充実

した疲労感を味わう事ができるので、外面的な事はもちろん、辛い事もいやな事もたくさんありますが、大切なのは内面的な事で、外面的な事は、それに消化されます。逆に考えればそれは、仕事に対し純粋な気持ちで対処できている事の様な気がします。

松風園での日常生活で一番強く感じる事は、園生ひとりひとりの深い心の結び付きの重要さです。こればかりはいくら理論的に机上で勉強しても、決して得られる物ではありません。しかも、非常に難しい事です。ほめるにしても叱るにしても、皆一様に同じでは、園生の気持は理解できない様に思います。居室指導教育指導、情操指導、作業指導等を通じて、自分の担当の園生ばかりではなく、すべての園生と話をし、聞いてやり、ひとりひとりそれぞれに気を配り指導し、またグループ指導等を通じて、職員全員一丸となつての上で、気持の接点を見出す事、これこそが私達の仕事で、何にもまして大切な事の様に思えます。

私が、今後この仕事を続けていく以上、これらの点に常に留意し、彼等の幸せは、私達の手で創るのだという事を第一に、理論的にも、実際的にも勉強し考え、自分自身の向上と共に、彼等の幸せの為、今後も努力して行きたいと思っています。

松風園の

園生に接して

指導員

太田さな江

精神薄弱者の重度—— いったいどんな子供達なのだろうか。自分にいろいろな考えを、ひとりひとりの子供たちを想像した。

自分自身「やりがいのある仕事を」と思っている気だけで、この職場を希望し、運良く指導員として採用された訳だが、福祉に関するすべての事にまだまだ無知で、正直なところ、そんな自分がそういう子供たちを、これからほんとうに指導していくのかどうか、又、その効果があるのだろうか、不安ながらも一月六日、園生を迎えた。

園生たちは、私が想像していたよりも、健康状態も良いし、程度もそれほど悪くなかったが、入所者の年齢差というか、高齢者もいたので驚ろいた。

入所して次の日から生活・健康・情操指導による園生としての生活が始まった。園生の一つ一つの行動に対しての指導や受け止め方等、いろんな事に対して戸惑う次第で、これでもいいかと心配と不安でいっぱい毎日の中で感じたことは、これか

らは、ほんとうに人間対人間としては極端な言い方かもしれないが、根気の勝負じゃないかと思う。

人間である限り、日常生活の中でどうしても必要な事が沢山あり、どれもこれも身につけてもらいたいものばかりだが、まず、多少の時間をかけても、集団生活に慣れてもらいたいと思っている。集団生活は、しだいに慣れていくものかもしれないが、それがなかなか難しく、中にはいつまでも自分の「から」から、出られないでいる人もいるだろうと思う。今まで、家庭で生活してきた子供たちは、精神者という事で、ほとんど家の中で過ごしてきた状態で接する人といえれば限られた人たちだろうし、そうすれば、多くの人達(友達等)という楽しみなど知るはずないと思う。その為にも、洗顔や掃除よりも先に集団生活に慣れ、大勢の人たちといる楽しみを知り、できるなら一つの行動にしても、仲間から見よう見まねで覚え、働らく喜びまでいかにしないにしても、一般の人間の生活が少しでもできるようになればと、ちょっと甘い考えかもしれないが、今はそう考えている。

今後の指導方針や施設のあり方などその他、あらゆる事を、これから園生同様一つ一つ、他の先生方や、他の場所でも吸収して勉強していきな

あとがき

「落葉踏み亡き人想ふ松風園」
芦川先生の急逝されたことを、九州の旅先で知り、一同愕然としたのであった。先生のご容体の良くないことはかねて聞いて、心配していた矢先きであった。

昭和五十二年度の全国大会は、南国の鹿児島市において開催された。帰形すると、すぐ先生のご霊前に頼づいた。いつもながらの笑みを含んだ温顔で、今にも話かけてくださるように思われてならなかった。ご焼香を終して栄光園に立寄る。いつも事務室でお会いできたのにお姿はない。ひとしお淋しく感じられた。暮に栄光園の保護者会に出席したが、勿論芦川先生のごあいさつのある筈もなく永久に先生とは、お会いできないという実感がこみあげてきた。

このたび竣工した更生施設を、先生は「松風園」と名づけられたが、竣工を待たずに亡くなられたことは誠に残念に思われる。

栄光園での授産、万世通動寮から職場へ、そして重度者のために更生施設、と子どもたちの幸せを、次々と広げてくださった芦川先生の深い愛情が、松籟の中に感じられてならなかった。今はただ先生のご冥福を祈るのみである。(はせがわ)